

『#茨鬼』（吉森大祐著）を読んでみた。著者は大学時代より小説を書き始め、卒業後、某電機メーカーに入社。40代半ばに執筆活動を再開し、『幕末ダウンタウン』で小説現代長編新人賞を受賞。本書は第14回本屋が選ぶ時代小説大賞の候補作となる。

時は、日本中の経済がどん底の時代である。天明の大飢饉など天災が続き、老中松平定信が「寛政の改革」を打ち出しているがうまくいっていない。主人公である若き下級武士の茨木理兵衛（やることがあまりに過激であったため、茨鬼と揶揄された）が藩主高嶷から勘定方に大抜擢された。彼の任された伊勢三十二万石の藤堂家も例外にもれず莫大な借金に喘いでいた。様々な改革を行い、実績を上げて、瞬く間に農政の重職・郡奉行に出世する。しかしながら、藩の財政赤字は酷くなるばかりで、ついに、財政再建の秘策「地割」（水飲み百姓に公平に農地を分け与える）敢行を決意する。だが反対勢力が立ち塞がる。

大変興味深い小説である。江戸時代に、底辺に生きる農民のために農地改革（戦後の農地改革と同じ）を断行しようとした若者がいたのだ。あまりに過激であったため、武士や土地持ち百姓などに反対され、一夜で潰される。その後、大商人（500両の給金）や徳川幕府上層部にリクルートされるが固辞して、伊勢藩に再採用されて、一生を終える。カネや権力で生き方を変えない清々しい人生である。歴史の授業では教えない埋もれた人物を掘り起こした名作である。

茨木理兵衛（1767—1816）

江戸後期の津藩郡奉行。17歳で300石の家禄を継ぎ大小姓加役に入る。江戸藩邸にも勤めたが、24歳で郡奉行になる。藩主に信頼されて藩政改革を支え、国益増大のための殖産政策と本百姓経営を復興させるための種々の農政に取り組んだ。用水井堰改造ではのちに神に祀られるほど功績をたたえられたが、貸借無期延期や均田などの政策を強行しようとして農民に反発され、百姓一揆で失脚した。その後、名を変えて放浪したが、1812年原禄で召還された。